

香川県の盆栽産地におけるマツ類葉さび病およびこぶ病の発病調査について

楠 幹生・藤村敬子*・井口里香**・藤田 究・鐘江保忠
・三浦 靖・加藤伊知郎**・香西俊哉***・梶野陽子****

香川県農業試験場研究報告 第70号(2019年3月) 53-58

2017年および2018年に香川県高松市のマツ盆栽産地において、*Coleosporium phellodendri* Komarov によるマツ類葉さび病および *Cronartium orientale* S. Kaneko によるこぶ病の盆栽での発病について調査を行った。その結果、葉さび病については、2017年の調査では86,777本、2018年の調査では94,707本のクロマツおよびアカマツに発病が見られなかった。さらに、中間宿主となるキハダが輸出用盆栽園地の300m範囲内およびその周辺に存在しなかったため、葉さび病の高松市のマツ盆栽産地での発生の可能性は極めて低いと考えられた。こぶ病については、2017年の調査では86,777本、2018年の調査では94,707本のクロマツおよびアカマツに、こぶ症状が見られなかった。一方、こぶ病の中間宿主は輸出用盆栽園地の300m範囲内およびその周辺に存在するものの、中間宿主上でのこぶ病菌の冬孢子堆の発生は確認されなかった。2016年の調査を含2016年の調査を含めると3か年、マツ盆栽にこぶ病が発生していなかったことや100年以上のマツ盆栽にもこぶ症状が見られないことから、こぶ病も高松市のマツ盆栽産地で発生していないか、または発生したとしても速やかに園地から除去されていたと考えられた。

キーワード：マツ類，盆栽，葉さび病，こぶ病，中間宿主